

クヌート、 きみはひとりじゃない。



短期連載 1

クヌート
世界一有名なシロクマ「Knut」の物語

カバとカメの奇跡の友情物語『オウエンとムゼイ』『オウエンとムゼイ なかよしのことば』に続き、世界でいまいちばん注目されているシロクマ「クヌート」の物語が同じ著者の手で写真絵本になります。今年11月に、アメリカ、日本ほかでほぼ同時に出版される予定です。出版に先がけて、クヌートをとりまく世界をのぞいてみましょう。

人気者クヌートの誕生

2006年12月5日、ドイツのベルリン動物園で生まれたシロクマ(ホッキョクグマ)の「クヌート」。彼は、育児放棄した母グマに代わって飼育係のトーマス・デルフラインさんに育てられているホッキョクグマの赤ちゃん。真っ白なむくむくの毛に輝く黒い瞳、かわいいしぐさに世界じゅうの人びとが熱狂し、彼の愛くるしい姿をひと目見ようと、連日ベルリン動物園には長蛇の列ができるほどの人気者になりました。

そのクヌートの物語はこんなふうが始まります。原文を読んでみましょう。

One December afternoon, in a cozy, dark enclosure in a zoo in Berlin, Germany, a polar bear cub was born. He was so small that a child could easily have cradled him. His eyes were closed tight, and his pink skin showed through his fine, white fur. He was just a tiny polar bear cub, but he would soon be loved by millions of people around the world.

His name is Knut, and this is his story.

(引用出典: "Knut: how one little polar bear captivated the world" told by Juliana, Isabella, and Craig Hatkoff and Dr. Gerald R. Uhlich; with photographs by Zoo Berlin. Published by Scholastic Press. ©2007 by Turtle Pond Publications, LLC and Zoologischer Garten Berlin AG)

Photo © 2006, 2007 Zoo Berlin / Peter Griesbach



Photo © 2007 Zoo Berlin / André Schüle

しかし、クヌートが世界じゅうの人に注目されるようになったのは、そのかわいい姿だけではありません。はじめは「母グマが育児放棄した子グマの命を救うべきではなかった。なぜなら、野生では、きっと助からなかった命だから」という投書が新聞に掲載されたことから。これには、飼育係のトーマスさんも動物園の関係者もショックを受けました。しかし、これに対し、助命を支持する意見も出て、人工哺育の是非をめぐる世論が世界各国に広まり、マスコミでも激しく意見が交わされるようになったのです。このようにしてクヌートの名前は世界じゅうに知れわたりました。ちなみに、ホッキョクグマの人工哺育はたいへん難しく、日本では、愛媛県立とべ動物園で育てられているピース(1999年12月2日生まれ7歳)がいるだけです。

世界じゅうで自分の「命」について議論されていることなど何も知らないクヌートは、毎日元気いっぱい遊んでいました。クヌートはいったいこの先どうなってしまうのでしょうか？ 続きは次号でお届けします。



絶滅に瀕しているホッキョクグマ

ホッキョクグマは、全身が白い毛に覆われていることからシロクマとも呼ばれ、北極周辺の氷原に生息しています。おもな食料はアザラシ。海水の上に広がる氷原で、呼吸をするために上がってくるアザラシを獲って生きています。夏になり氷が溶けるとアザラシを獲ることができないため、ほとんど何も食わずに数か月を過ごし、再び海が凍るのを待ちます。ところがいま、地球温暖化の影響で、北極の氷は春にはかつてより早く溶けはじめ、秋になってもなかなか凍らなくなってきています。氷原の範囲が減ったことで、狩りができるエリア、時期が確実に減り、ホッキョクグマはいま絶滅の危機が叫ばれています。

お知らせ

写真絵本『クヌート』(仮)は、NHK出版より2007年11月末に発売される予定です。



クヌート、 きみはひとりじゃない。



短期連載 2

クヌート
世界一有名なシロクマ「Knut」の物語

母グマに代わって、人間に育てられているベルリン動物園のシロクマ、クヌート。ある日、世界中がその名を知ることになる事件が起こりました。「そのシロクマの命は救うべきではなかったのではないか」という意見が新聞に掲載されたのです。これをきっかけに、彼の命をめぐる議論が世界各国で激しく交わされ、クヌートのまわりはだんだん騒がしくなってきました。

すくすく育つクヌート

この論争がもたらした騒ぎに、ベルリン動物園のスタッフも、飼育係でクヌートの母親代わりのトーマス・デルフラインさんも、驚き、とまどいました。そしてクヌートを応援しているみんなもショックを受けました。しかし、クヌートは目の前でなめています、お腹をすかせています、生きています。トーマスさんたちは、クヌートのことだけに集中することにしました。

もちろん、クヌートは、そんな大騒動なんて、知るよしもありません。彼は、毎日、生きるために、食べること、遊ぶこと、新しいこと、例えば、砂でゴロゴロするのは楽しいけれど、食べるとまずいということなどを覚えるのに必死です。なかでも、クヌートが経験する「はじめてのこと」は、まわりの人びとに幸せな笑いをもたらしてくれました。その愛らしくもけなげに生きる姿に、多くの人が勇気ももらいました。そして、どんなことがあっても、この目の前のちいさな命を大切に大切に育てていこうと改めて心に誓うのでした。



Photo © Sean Gallup/
Getty Images

ここで、クヌートがはじめてひとりで食事をするシーンを原書で読んでみましょう。

He already loved to tussle with his stuffed animals or blanket. A month later, he took his first wobbly steps on all four paws. A week after that, he had his first meal of milk, with a bit of kitten food mixed in, from a bowl.

Thomas and André laughed as most of the food ended up on Knut's fur and the floor, and very little ended up inside Knut. But he certainly enjoyed it.



Photo © Rainer Jensen/
epa/Corbis

ちいさな一歩

そのかわいらしさ、やんちゃな行動、トーマスさんを信頼しきってたわむれる姿に、人びとはますますクヌートに夢中になっていきました。クヌートに会うためにベルリン動物園を訪れる人は後をたたく、毎週200通ものファンレターが届けられました。だれもが彼を愛さずにはいられなかったのです。

クヌート人気が高まるにつれ、人びとの心にはある変化が起きはじめました。クヌートを通して彼の仲間、すなわち、遠く北極圏にすむシロクマたちのことも親近感をもって考えるようになってきたのです。地球温暖化の影響で、野生のシロクマの生きる場所である海氷がだんだん減ってきていて、シロクマはいま絶滅の危機にあります。「わたしたちが生きているあいだに、野生のシロクマはいなくなってしまうだろう」と予測する科学者さいます。クヌートを愛する人びとは、そのことに思いいったったのです。これが、わたしたち人間の「ちいさな一歩」になったのです。

次号もどうぞお楽しみに!



おしらせ

カバとカメの奇跡の友情物語『オウエンとムゼイ』『オウエンとムゼイ なかよのことば』の著者であるハトコフ親子による

写真絵本第3弾、クヌートの物語が写真絵本となります!

『クヌート ちいさなシロクマ』(定価1260円)は、NHK出版より2007年11月29日に発売されます。



クヌート、 きみはひとりじゃない。



短期連載 3
最終回

クヌート
世界一有名なシロクマ「Knut」の物語

ベルリン動物園の人気者クヌート。誕生時には810グラムだった体重も、いまでは約100キロに成長しました。ちいさなクヌートが大きくなったように、ちいさな命を見守っていた人びとの行動も大きく変わっていきました。

クヌート、環境保護の象徴に

飼育係のトーマスさんはじめベルリン動物園のスタッフ、それを支えてくれた人びとのおかげで命が助かったちいさなクヌートは、いつしか、命のこと、そして地球環境のことを考えるきっかけを与えてくれる大きな存在になっていました。地球温暖化をくいとめるにはどうしたらいいのか。自分たちの生活のどこを見直せばいいのか 人びとは考え、学び、行動に移していきました。ちいさなシロクマが大きくなったように、自分たちも環境に対してできるちいさなことを積み重ね、さいしょは一人でも、できるだけ多くの人びとと協力することで、大きな動きになるように努力していったのです。

さらにそんな中、ドイツのガブリエル環境相は「地球温暖化にもっとも脅かされている生き物がホッキョクグマで、このまま温暖化が進めば見ることができなくなる」との理由からクヌートを環境保護問題の大使に任命しました。今やクヌートは、名実ともに環境保護を訴えるドイツのマスコットの存在になったのです。



Photo © Marcus Brandt/AFP/Getty Images

クヌートの物語の結末は……

育ち盛りのクヌートは、毎日どんどん大きく強くなっていきます。昨年12月に生まれたときは、育ての親トーマスさんが24時間つきっきりだったのが、いまではクマとして生きていくために、離れて暮らしています。それでも、ト-



Photo © Arnd Wiegmann/Reuters/Corbis

マスさんは、クヌートがひとりだちするまでずっと見守っていきましょう。そして、いつまでも特別な存在でありつづけるでしょう。トーマスさんにとってクヌートは大切な大切なわが子だから。

写真絵本『クヌート ちいさなシロクマ』は、つぎのような言葉で締めくくられています。

Knut may be just a tiny polar bear cub, but he inspires us to do everything we can to help polar bears in the wild. Together, we can take small actions that will lead to big change. If we all do our part to help save the polar bears' natural habitat and all natural habitats we will give Knut's story a very happy ending indeed.

クヌートの物語を完結させるのはわたしたち人間です。クヌートに魅了された人びとが、失われてゆくものの重大さを知り、クヌートを通して感じた生命への愛と共感を、遠く北極にすむシロクマに飛ばしたように、わたしたちも地球そして環境に対してできることについて考えてみませんか？



おしらせ

『クヌート ちいさなシロクマ』(定価1200円)が、NHK出版より発売されました！
カバとカメの奇跡の友情物語『オウエンとムゼイ』
『オウエンとムゼイ なかよしのことば』の著者であるハトコフ親子による写真絵本第3弾です。お楽しみください。

